

《アンデレクロスの八章》「世界の市民」に向けて
『アンデレクロス』（桃山学院大学広報第96～112号、2000.10.～2003.12. 所収）

村田 晴 夫

目 次

- 第一章 現代文明と教養（『アンデレクロス』No.96, 2000.10.）（ゲーテ）
- 第二章 地域社会と世界市民のために（『アンデレクロス』No.98, 2001.1.）
- 第三章 文明の変貌と転換（『アンデレクロス』No.102, 2001.12.）（ホワイトヘッド）
- 第四章 「自由」と「愛」について（『アンデレクロス』No.104, 2002.5.）（CUAC）
- 第五章 「愛」そして「開く」ということについて（『アンデレクロス』No.106, 2002.10.）（ロマン・ロラン）
- 第六章 「自由」と「愛」と「家庭」（『アンデレクロス』No.108, 2003.2.）（トーマス・マン）
- 第七章 「生きられる学問」のために（『アンデレクロス』No.110, 2003.7.）（岡潔）
- 第八章 世界の平和そして愛（『アンデレクロス』No.112, 2003.12.）（福永武彦）

各章にそれぞれ要約（冒頭〈〉部分）を付した。全文または一部を割愛した章もあるが、要約がその欠を補ってくれることを期待している。各章で引用されている人名あるいは団体名を、複数の場合は主要な1名を選んで各章ごとに括弧で表記した。また、一部の表現を改めた箇所もある。

..... 《アンデレクロスの8章》

第1章 現代文明と教養——「世界の市民」に向けて（1）

〈要約：世代を追って変化していく現代文明、その中で「世界の市民」への自己生成はいかになされるのかを考える。〉

「世界の市民」とは①自己を、自立した、自由な人間として確立して行くこと、その人間形成を基礎として、②民族・宗教・国家の枠を超えて、全人類としての世界という自覚に立って、③現代文明の諸問題に自ら立ち向かっていく人間である。そうしてそこに④宇宙の愛と真理に沿う方向で自己を生成していく人間である。それを成し遂げる力となるも

のが教養である。教養は、専門性を生かして自己を実現するための土台であり、より豊かな自己を生成することである。

それらのことが、ゲーテ『若きウェルテルの悩み』を引用しながら語られる〉

「世界の市民」としての自己を造る、これを目指した教育をすることが桃山学院大学の使命です。それは具体的にどのようなことでしょうか。それを何回かに分けて、お話していきたいと思います。今日はその基本前提となる現代文明の特質と、教養ということの意味について述べます。

現代はめまぐるしく転回する流れの中にいて、人々はその流れに合わせて自分をしっかり確立していかなければならない時代です。その傾向はますます激しくなるでしょう。そして21世紀には、もっと根元のところに影響を与えるような変化がやってくる可能性があります。人々は、表面の変化に対応していけばよかった時代から、自分で積極的に流れに参加し、流れを惹き起こすような、より冒険的な人生を覚悟しなければならない時代に入りましょう。

このような来たりつつある現代という時代に、どのように自分を造り上げ、行動していくべきか、それにたいする答えが「世界の市民」ということの中に見いだせるのでなければなりません。

「世界の市民」とは、まず自分を自立した、自由な人間として確立し、独立した生活を何ものにも妨げられない自分自身のものとして世界の中で打ち立てることが出発点になります。そして、民族・宗教・国家の枠を超えて、全人類としての世界という自覚に立って、現代文明の諸問題に対処すべく、自ら立ち向かっていくことのできる人間でなければなりません。そうすることによって宇宙の愛と真理に沿う方向でより深く、より高く、自己を実現すること、これが「世界市民」のイメージです。

教養とは、これに関わって、よりよく自己を確立することであり、専門性をより十分に生かして自己を実現するための土台であり、またその成果をとりいれて新しい自己をより豊かにすることでもあります。教養とは、造り上げておしまいとなるものではなくて、絶えず造り上げていくものであり、その活動の過程こそ教養というべきなのです。生きる、生活するとは、自分を造り上げていく過程であり、それはその人が生を終えるまで継続します。そしてそれこそ、つまり自分を造り上げることこそが教養なのです。

現代文明において失われつつあると懸念されること、教養の喪失につながると心配されることのひとつは、空洞化しつつある文明の芯の部分を忘れることであり、それによって教養の芯となるものが見失われる、ということです。

「電車がどういう仕組みによって走るのか知らなくても一向に構わない。人々はただ電車がどう動くかを予測できればよいのだ」とマックス・ウェーバーは述べています（『職業としての学問』岩波文庫）。それが近代文明の本質なのです。コンピュータと、インターネットに象徴される現代文明ではいっそうこれが進みます。わたしたちはそれが作動する理屈を知る必要はありません。ただそれらが使えればよいのです。これが近代そして現代の文明のスタイルなのです。そしてここに問題点があります。それはわたしたちが大きなブラックボックスの上にのせられていることです。これは教養のなかに大きな穴を開けることになります。このような時代がやってくるほんの少し前までは、わたしたちは自然と触れることと古典文学を読むことを通して、教養の破れ目をふさぐことができていました。たとえばそれをゲーテによって見てみましょう。

ゲーテの青春時代の作品で、だれでもその名を知っている『若きウェルテルの悩み』に次のような一節があります。「なんと幸せなことか、自分が畑で作ったキャベツを食卓にのせる人の、素朴で無邪気な喜びを感じることができる。」美しい自然に囲まれてウェルテルはここを開放し、ホメロスのオデュッセイを読みながら、こう感ずるのです。「その人が植えた美しい朝、水をそそぎ、成長を喜んだ愛しい夕べ、それらのよき日々を（キャベツを食卓にのせたときに）一瞬のうちにすべて味わいかえす、そういう喜びをまるで自分のもののように感ずることができるとは。」（一七七一年六月二十一日の日付の手紙）そのときウェルテルはえんどう豆を自分で火にかけてバターであぶっています。火のそばに座りこんでときどき揺りまぜたりしています。その動作がホメロスのオデュッセイのなかの一節と重なってくる、ということになっているのですが、これを書いたときのゲーテは二十五歳。自分の体験をウェルテルに託して書いているのです（『若きウェルテルの悩み』岩波文庫、新潮文庫など）。

こういう経験はたいへん素晴らしい、貴重です。いま、食事をするときに、こんな想いをもつことができるでしょうか。

文明が進歩して、社会が物質的に豊かになればなるほど、こういう想いは失われていきます。キャベツがどのように育てられたか、あまり考えなくなりますし、たとえ考えてみたとしても、キャベツや多くの農作物はもっとザッハリッヒ（即物的）に育てられているに違いありません。それが近代文明の形なのです。あまりにも即物的になりすぎる、これが現代文明の問題です。それは植えるときの喜び、育てるときの喜び、そしてその成果を食卓の上に見て、それらを育てるまでの苦勞も忘れて、すべてが喜びの中に包み込まれるというあの感激、そういったことが、現代人の心から離れていってしまうこと、これが問題なのです。

ウェルテルはホメロスを読んでいました。わたしたちも、ゲーテや、マックス・ウェーバーを読むことができます。マックス・ウェーバーの中にはゲーテが出てきますし、ゲーテにはホメロスが出てきます。⁴こうして遡っていくと、わたしたちは文明の始原、人間の文化の源に触れることができ、そして教養としての人間形成の基礎に行き着くことができるのです。

文化は文明社会のいわばここに当たるものなのです。このところをわがものとするところから、「世界の市民」としての行動のセンスが生まれるのです。

（『アンデレクロス』No.96, 2000.10.）

第2章 地域社会と世界市民のために——「世界の市民」に向けて（2）

〈要約：地域社会における「世界の市民」の育成の意味を考える。地域社会がグローバル化、そして家庭との対比において捉えられ、その中で大学自体が「世界の市民」として自己を位置づけて、果たすべき意味を考える〉

世界がインターネットで結ばれています。情報が瞬時に世界中の各地にとどきます。そしてそれに続いて品物が届き、ものがいっそうはやく、安く、行き交います。人の往き来も世界に広がり、交流できるようになり、お金もまた動きます。新しい時代へと進みつつあることはだれもが実感しています。このような時代の変化の中で、関西はその位置をこれまで以上に確立していくことが求められます。それは地域社会の伝統を継承しつつ、地域の文化特性を現代において解釈して具体化することであり、言い換えますと、文化の継承と発展であります。そして桃山学院大学は分けても南大阪という地域社会において、その一員として、地域社会の文化の継承と発展に責任を負うのだといえましょう。

世界の文明が、いま情報化とグローバル化を大きな軸として、地域社会の文明として展開していこうとしているとき、またその流れは関西の、そして南大阪の文明発展の大きな枠組みを担うものでありましょうし、またそうでなければなりません。しかし文化には関西に固有のものが、そして南大阪に固有のものがあるのです。これをわれわれは共有の財産として育み、それを共有の場所として地域社会を形成していかなければなりません。文化は私たちが共有する生活の場所なのです。文化は前回取り上げた教養ということと関連しています。文明はその場所を内にもって、生活の形を作り出していくもの、つまり生活の形式なの

です。これらの内なるところ（文化）と外へ向かう形式（文明）とは調和あるものとして形成されなければなりません。その調和の形成が遅れるとき、社会にはいろいろな問題が起こります。調和の未熟さは人々に不安感を与えますし、とかく人々の間に摩擦を惹き起します。そして外に向かって戦闘的になるか、または内に対して自滅的になります。

これは家庭の崩壊と似ています。家庭は内に健康な心を持たなければなりません。それは愛のところです。そして愛を育み、発展させるためには経済的にしっかり自立した家計がなければなりません。それが外へ向かう積極的な要因なのです。経済的な自立と家庭内の愛の心、これが調和していることが家庭の維持には必要です。その調和に参加する大切なものが二つあります。一つは心身の健康と安全です。これは社会の連帯のなかで形成される安全と安心のネットワークによって支えられるものです。もうひとつは子孫への継承です。子供を産み育てること、そしてよりよい教育をすることです。これもまた、一家庭の枠を超えて、社会のネットワークにおいて支えられるべきものです。家庭においてこれらのどれひとつが不十分であっても、家庭は不調和を来すでしょう。そしてその救済がなければ崩壊するでしょう。

地域社会はその意味で家庭に似ています。地域社会の文化と文明が調和することが必要だと申しました。地域社会もまた、グローバルな文明にしっかりと対応していかなければなりませんし、かりに地域社会を行政単位として捉えたときには、それらの行政体は広く連携していくことが必要であります。それは健康と安全と安心のためのネットワークということであり、人間教育と生涯学習ということへの地域社会としての参加であります。そのときにまたぜひ考えなければならないのは、健康とは何かということであり、人間は必ず病みます。病むこと、苦しむことが実は当然のことなのです。では健康の条件は何かといいますと、それは病を自覚しつつ、前向きに生きることだということです。地域社会にもこれがあてはまります。地域社会の健康ということが言えます。地域社会の健康の条件とは、病む人々を知り、苦しむ人々を知り、それらをわがこととして受け入れることであります。安全と安心についても諸条件の相互関係において同じように考えられなければならないでしょう。安全については特に防災と環境問題が大きな問題として含まれます。

さてこれらはいわば地域社会の内向きの側面です。いわば文化の側面です。文明の側面はやはり二つ考えなければなりません。一つは先に述べた文化の側面を事業として具体化することです。ここに最新の文明的技法を導入することを図るのであります。もう一つは経済的発展です。これは必然、地域社会をとりまくより大きな社会とグローバルな地球社会全体との文明的・経済的技法と関わってきます。

大学はこうした地域社会とグローバルな社会との間を媒介する役割を担うべきであります。それは第一に地域社会の構成員としての自覚を持つことであります。すなわち大学は地域社会にあって、自らが一つの家庭のごとき役割を担うということの意味します。それを整理して言えば、内にしっかりしたところをもつことであり、外にたいして広く開かれた教育と研究を進めることであります。内に抱かれたところは文化と総称されますが、大学ではこれは教育理念に当たります。わが桃山学院大学では、これこそ「世界の市民」を養成することという建学の理想に当たるものなのです。外に向かって開かれた教育と研究は、この理念に立脚した深い教養に支えられて、経済と社会の文明の理法と技法に交わっていくべきもののなのです。それはすなわちグローバルな地球社会の文明を絶えず地域社会に媒介することに努めることでもあります。

このように見てきますと、桃山学院大学がそれ自体としてひとつの「世界の市民」のごとく、しっかりと自立しながら、自由な立場に立ちつつ、社会においてその役割を果たしていくのだということが見えてまいります。

（この稿は「大阪府南部市議会議員研修会」（平成 13 年 1 月 15 日）における講演「地域社会と大学」の一部に手を加えたものである）

（『アンデレックス』No.98, 2001.1.1）

第 3 章 文明の変貌と転換 —— 「世界の市民」に向けて (3)

〈要約：変化の時代に磨く「世界の市民」について語る。教育の問題が重要である。文明の転換と変貌を区別し、文明がその骨格まで変革されることを「転換」と呼び、骨格はそのまま、一世代ほどの比較的短期間において生活の形式の変化として現れる文明の姿を「変貌」と呼ぶことにする。20 世紀の文明の変貌の歴史を振り返りながら、いま進展しつつある文明の転換の時代の変化に対応する「世界の市民」の生成と教育の方向について、ホワイトヘッドに依りながら考える〉

「教育の問題はつねに新しい。」これはホワイトヘッドが言ったことばです^(*)。だいたい二十五年もすれば、当初の大胆な試みであったものも、陳腐なものになってしまうであろう、と彼は続けます。二十五年というのは、ひとつには文明の変貌と密接に関わっています。そしていうまでもなく世代交替の年限も意味していることでしょう。ホワイトヘッドは、有名な『科学と近代世界』(Science and the

Modern World, 1925) という著書のなかで、近代を世紀毎に区分してその時代の特色を分析して見せています。ややマクロにはそれでよいわけで、時代の特色と流れが鮮明に浮かんできます。そして百年刻みでよかったいまひとつの理由は、時代の変化がそういう尺度で済むほどであった、ということが挙げられるでしょう。しかし、二十世紀はもっと速いテンポで進んだのでした。

多分、二十世紀の文明は、少しミクロな視点で見ると、二十五年くらいで変貌していたのです。ここでは、私は「文明の転換」という言葉を、大きなあるいは革命的な変化という意味で使います。そして同質の文明でありながら、その相貌が変化する——それはしばしば起こることです——様子を表すときに「文明の変貌」ということばを使うことにします。

二十世紀の文明は大量生産方式の普及によって導かれてきました。それは文明の転換ではなく、文明の変貌でありました。しかし、極めて大きな変貌であり、産業革命のもたらす成果が最終段階に入ったことを示しております。

この二十世紀文明の形と個人の生き方の関係が問われなければなりません。その問いにたいして、人類は有効な答えを用意できたのでしょうか。ホワイトヘッドはこれにたいして疑問符をつけています。言い換えますと、大量生産が機能するような文明社会の中で、人間は個人としていかに自由にありうるのか、という問題であります。ホワイトヘッドは美の問題について論じます。機械文明に呑み込まれないところの「美」というものに目を向けようというのです。これらは教育の問題にどのようなつながっていくのでしょうか。それについてホワイトヘッドに依りながら私見も交えて述べてみましょう。

「教育とは抽象的な知能に訴えるだけのものではない。目的をもった活動、知的活動、その成果の実感、これらが一体化して経験されなければならない。」おおよそこのようにホワイトヘッドは言います^(**)。そこに「美」という感覚が生かされねばならないということです。「美」というのは、素朴には、真なることが美と一体化するということがあります。ホワイトヘッドは「真的美」ということを言っています。究極においてはこれらは「善」とも一致するのだと思います。これはアートにおいて現れます。それは芸術であり、技芸であり、技能であります。実学的技能は磨かれてアートに達するはずで

それぞれの文明の相貌において、それに合わせた教育が求められるでありましょう。目的をもつこと、そして活動すること、知的活動、そして成果の満足と不満足の実感。これらが教育において結合されて学習されなければなりません。そのとき、人間の持っている豊かな可能性を開花させることにつながらなければなりません。そのためには、人間にとっての不変なるものについても教育は目を向けなければ

ばなりません。不変にして普遍なるもの、これを指し示すものが古典と呼ばれるものであります。それがアートに指向することを通して、人間の豊かな可能性もまた見いだされ、発展させられるのです。

私は、「世界の市民」というのはそのような、個人の可能性を豊かに発展させるような教育において培われるものだと思います。

時代の変化はその足音を速めています。わたしたちは今、文明の転換期にいるのではないのでしょうか。文明の相貌が変化しつつあるのは確かなようです。それはより大きな変化の時代、つまり「文明の転換」の時代、を迎えているのではないのでしょうか。

二十世紀は、ある意味で二十五年ほどの周期で文明の変貌が起こってきました。それはまた、戦争を契機として区分することもできますとも言えます。第一次世界大戦までの時代が一つです。この時期は「科学的管理の勃興の時代」と呼ばれてよいでしょう。科学的管理こそ、大量生産を可能にした管理技術でした。それから第二次世界大戦の間のいわゆる戦間期です。この時代は困難な時代でした。ホワイトヘッドが「有機体の哲学」を完成させた時期でもあります。それは機械主義にたいする反省と批判でもありました。そして第二次世界大戦以降の時代から一九七〇年代までです。これはベトナム戦争の終結によって括することもできます。この時代には新しい科学技術の成果が社会化し、科学的合理主義がいっそう進んだ時代でもありました。情報化の第一歩が記され、その後の展開の基礎が作られました。また宇宙開発が始まりました。そして公害や環境問題が起こってくる時代でもありました。さらにそれ以降の時代は、冷戦構造の終結という特記されるべき出来事で括することもできるでしょう。この時代を私は「有限性の時代」と呼んだことがあります。無限なる者が見失われた時代、という意味です。

戦争で括られるのは悲しいことです。しかし二十世紀の歴史を見ると、どうしてもそういうようになってくるのです。

いまわたしたちは「文明の転換」期にいます。それは何度か書いたように、情報化ということが大きな要因です。グローバリゼーションもあります。それらのもつ複合的性格がますますはっきりしてきたようです。二十一世紀は二十五年よりはもっと速いテンポで文明の相貌が変わるでしょう。そしてこの九月十一日の同時多発テロ以来、世界はまたもや不安な時代に入ってきました。新しい形式の戦争が始まりました。

そのような変化と不安の時代にも耐えることのできる自己を造っていかねばなりません。教育はそれを目指さなければなりません。その方向は「世界の市民」を養成することであり、我々はそれを目指して進むのであります。

(*) Whitehead, A. N., *Essays in Science and Philosophy*, Part 3. Education, 1947., New York, Greenwood Press, 1968, p.151.

蜂谷昭雄他訳『科学・哲学論集(上)』第三部「教育」(ホワイトヘッド著作集第14巻)、松籟社、1987年、181頁。

(**) Ibid., p.164. See also SMW, Chapter 13. 邦訳、上掲、196-198頁。また『科学と近代世界』の第13章「社会進歩の要件」を参照。

ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead, 1861-1947)は英国生まれの哲学者。ロンドン大学定年の年にアメリカのハーバード大学哲学教授に招聘され、「有機体の哲学」を完成。わが国では『ホワイトヘッド著作集』(全15巻、松籟社)が出ている。

(『アンデレクロス』No.102, 2001.12.)

第4章 「自由」と「愛」について——「世界の市民」に向けて(4)

〈要約：2002年3月15-18日、立教大学で、CUAC (Colleges and Universities of the Anglican Communication 世界聖公会系大学連盟)の第四回世界大会が開かれた。大会のテーマは「世俗化と多信仰社会におけるキリスト教大学の役割 The Role of a Christian University in a Secular and Multi-Faith Society」。

この大会で桃山学院大学の建学の精神「世界の市民」を中心に報告された内容を伝える。抄録)

いま大学教育が置かれている状況は、一言でいって「来たりつつある文明にいかに対応するのか」という問題の中に置かれているということです。これは世界の大学全体に当てはまることです。それにたいして大学がなすべき努力の方向は、大学教育の本質を絶えず意識し、それを時代の文明論的趨勢の中で鍛え上げること、それを通して自己の特色を鮮明にし、優秀な人材を育てることではないと思います。

それぞれの大学がその存在理由をより鮮明にすることが求められています。そこにこれからの大学の生命がかかっているのです。それぞれの大学が教育の理念を今の時代に合うように解釈しなおし、さらに文明論的趨勢を先取りして生命を付与することを通してそれを内外に宣べ伝え、教育にそれを生かすことによって達成されるのです。

桃山学院は建学以来、「自由と愛」を基本精神としてきたのであり、一九五九年

に大学が創設され「キリスト教精神に基づく人格の陶冶と、それに基礎をおく世界の市民の養成」を教育の理念として掲げて進んできたこと、そして「世界の市民」の養成ということの建学の理念をわれわれは大変誇りに思っています。

「世界の市民」とは、自立した自由な人間として自己を確立することが出発点にあります。そして民族・宗教・国家の枠を超えて、全人類としての世界という自覚に立って、現代文明の諸問題に対処すべく自ら立ち向かっていくことのできる人間でなければなりません。そうすることによって、宇宙の愛と真理に沿う方向で、より深く、より高く、自己を実現してゆくこと、これが「世界の市民」なのであります。

文明論的趨勢とは具体的に何でありましょうか。もっとも強調されなければならないのは情報化社会への移行ということであり、グローバリゼーションによって伴われているということです。この両者——情報化とグローバリゼーション——はいま、一方的な競争社会を生み出しつつあります。宗教間には深刻な断絶があります。これは広く文化と文化の間の断絶・民族と民族の間の断絶であります。

競争社会の倫理——それは競争の止揚をもたらす原理でなければなりません。勝者も敗者もともに最後にはそれまでよりも良くなっているものでなければなりません。それを可能にするのは「愛」であります。いまわれわれの社会には「愛」の場が欠如しています。「愛」の根本には「共に」「いっしょに」ということがあるのです。「共に喜ぶ」「共に悩む」「共に苦しむ」…「共にいる」。そして「共に」が成立するためには、自己を主張しすぎないことが必要です。

「愛」ということはどこかで自己を虚しくする——つまり自我を放棄する——ことが必要になってきます。そこに自由との葛藤があります。「自由」は自己を確立することから始まるのですから。これをいかに調和させるかが問題となってきます。自己が他者の喜びをわが喜びとし、他者の悩みをわが悩みとするためには、それを受け入れるだけの広さと大きさがなければなりません。そうなるように努力することによって、人間は少しずつ「自由」と「愛」の調和を学ぶことができるのではないのでしょうか。

CUAC 世界大会ではおおよそこのようなことを述べました。

夜の分科会では、昼間の時間に私が触れておいた「無 Nothingness」の思想についても議論が行われました。得るところの多い大会でした。

(『アンデレクロス』No.104, 2002.5.)

第5章 「愛」そして「開く」ということについて——「世界の市民」に向けて (5)

〈要約：「愛」の対象は限定されても良いのだろうか…。「愛」は閉じたものであってはならないであろう。「愛」は悲劇を超えて、その彼方に開かれているのでなければならぬ。ロマン・ロランの『魅せられたる魂』に見られる「開かれた愛」の姿を語る。抄録〉

(原文前半省略)

もっと大きなものが「愛」にはあるように思います。それは「挫折」の克服であり、「悲劇」の超克への力なのです。

ロマン・ロランの作品に『魅せられたる魂』という長編があります。主人公のアンネット・リヴィエールは素晴らしい女性に成長していきますが、その過程ではさまざまな苦勞をします。その最たるものは、ひとり息子マルクを、全体主義体制の中の暴虐な行為によって失うことです。時代は第一次世界大戦後、そして第二次世界大戦前のことです。しかし息子には家族がいます。息子の子供（ヴァニヤ）がいます。その母親（マルクの妻）は亡命のロシア人女性です。マルクの死後、そのロシア女性（アーシャ）はアメリカ人と結婚します。そして生まれた子供（ワルドー）がいます。これら全部を、アンネットはわが家族として愛するのです。

ここには未来の家族の愛が語られているとも言えます^(*)。

アンネットには息子を失った無限の悲しみがあります。まさに「聖母マリアの悲しみ」です。それを超えて、アンネットは家族を愛するのです。あるいは「愛」によってそれを超えるのです。超えたところには不安はありません。そこには「愛」に裏付けされた強さがあります。「愛」によって挫折は超えられ、そして対立を超え、悲劇を超えて進むところに「平安」があるのだということを教えてくれているように思います。

(*) 村田修身氏からの教示による。

(『アンデレックス』No.106, 2002.10.)

第6章 「自由」と「愛」と「家庭」——「世界の市民」に向けて (6)

〈要約：社会はさまざまな組織体の複合として現れるのであるが、それら組織体の原点には家庭がある。家庭は「愛」を目的とした組織体である。しかしまた「愛」は実現が難しいことも現実である。家庭には自己の開放の役割があり、個の欲望の開放と衝突が日常

でもある。人間は間違いを犯す存在であり、不完全な存在であることが現れる。そして不完全だから前に進むのである。

あらゆるシステムが不完全なのである。不完全だからこそ前に進むことができるのである。それは「システム不完全性の原理」と呼ばれる。

この原理はまた、システムがそれひとつだけ単独で存在することはできない、という意味を含んでいる。人間においてはそのことが強く自覚されるのであり、それが「愛」の原点をなす。

一方で人間は絶えず欲望とその自覚という人間の持つ宿命（原罪）を背負いつつ生きるものである。ここに意思の自由もまた現れるのである。そして理性の判断規範も現れるのである。

人間におけるシステム不完全性の原理に密接に関連しているのが教育である。トーマス・マンを引きながら、愛と教育について語られる。教育の原点には愛がなければならないこと、教育への使命感はまた自らの不完全性・不調和に触発されることに基づくのだということである。「愛」と「自由」、そして「家庭」ということの意味が「教育」思想の中に言い留められている

1.

現代社会は、さまざまな組織体から成り立っています。大学も一つの組織体です。企業や非営利組織も組織体です。国や地方自治体も組織体です。もちろん、国連のような国際組織も含まれます。私は、これらの組織体の最も原点のところに「家庭」があると考えています。「家庭」について私の考えるその特徴を挙げてみましょう。

家庭とは、まず第一に、愛によって結ばれ、愛を強く伸ばしていくことを目指しているところです。第二に、家庭とはそこで幸せになるところです。第三に、家庭とはよそ行きの服装を解くところです。これはある意味で社会的自己を解体するところと言ってもよいでしょう。自我あるいは自己は、社会ではしっかり維持されていなければなりません、それは疲れる技です。ですから、ときどきそういうよそ行きの服装を取って、気楽に自己のありのままの姿に戻る必要があります。そしてこれが大切なところですが、よそ行きの服装を取ることで、社会的自己をいったん解体することによって、次の新しい自己を準備するのです。ですから、家庭とは、第四に、自己を蘇らせ、自己を再生するところなのです。この第三と第四を合わせて、家庭とは自己の創造的個体形成の場であると言ってもよいでしょう。さて、第五には、家庭は自己の子孫への継続を果たすところです。これは言い換えて、家庭とは、自己の世代的創造と存続の場である、と言うこともできましょう。

2.

ところが、こういう理想的な家庭は現実には困難です。特に、第一要件の「愛」によって結ばれ、愛を紡ぎだしていくことが極めて難しいことだからです。それが達成できていれば第二の要件である幸福になれる場所だということは明らかなようにも見えます。しかし、幸福とは何かと問いかけてみると、それは人によって異なっていますし、一定の統一した答えが得られるようには見えません。私がここで幸福というのは、究極の真・善・美の姿を求め得る自覚を意味します。つまり、真の自己実現への途上にあるということです。それは罪の赦しが与えられ、失敗にたいする思いやりがあるということと重なってきます。人間は絶えず間違いを犯したり、失敗をしたり、悪と切り離せないような行為をしたり、あるいはそれらのことをする可能性を自らの内に抱いています。これはまた原罪ということとも関連してくるのですが、私はそれを「システム不完全性の原理」と呼んでいます。

これは、現実に存在するあらゆるシステムには完全ということはありません。これを述べています。人間もまたひとつのシステム（有機体システム）だと考えられます。そして人間が作るいろいろなもの、しくみ、組織や制度はそれぞれがシステムです。宇宙のたとえば太陽系、そして地球上の生態系、山川草木それぞれがシステムです。それらのあらゆるシステムは不完全なのだという意味です。これはそういう現実をそのまま受け入れようということでもあります。不完全だからよいのだという認識につながっていきます。不完全だから前に進めるのです。絶えず前に進むしかシステムとしての存続はできないのです。またこの原理は、システムはそれひとつだけが単独で、独立して存在することはできない、という意味を含んでいます。人間においてはそのことが強く自覚されます。それが愛の原点です。共同すなわち「皆で一緒に」ということが人間の生活の本質のところにあります。「家庭」においてそれが明確に現れるのです。

それにもかかわらず、人間は絶えず自立と責任応答を促されています。それは欲望とその自覚という人間の持つ宿命（原罪）とつながっています。ここに人間の自由が明確な形で現れます。自立というこの人間の個にたいして求められているものは、欲望と衝動の自覚への応答であり、充足されたかに見えてもたちまちに消費されて尽きることのない欲望と、そこに現れる理性の判断規範なのです。

このような人間の本性に伴うことが余すところなく露呈されるのが家庭という場の特徴です。家庭の第三要件で述べた、家庭は自己を解体するところである、ということがそれを意味しています。このように語ってくれば、もう明らかになってきたでしょう、家庭には倫理・道徳の基本があるのだということが。そしてそれがまた、社会の倫理・道徳の基盤にもなっているということが…。

3.

いろいろな組織体が社会を構成している、と述べました。いろいろな組織体の根源には「愛」と「自由」があるはず。それを欠いた組織は長続きできないはず。そして組織の存続と発展には教育が必要です。教育の原点には愛がなければなりません。

教育は「愛の主要な表現である」とトーマス・マンは述べています（『作家としてのゲーテの生涯』『ゲーテを語る』山崎章甫訳、岩波文庫、84頁）。これはゲーテの『ファウスト』や『ヴィルヘルム・マイスター』を念頭において言っているのですが、これに続いてトーマス・マンはこういう意味のことを言っています。教育へと向かう衝動や使命感は、自分自身が不調和の状態にあるからなのだ、と。ここでトーマス・マンは「告白」ということを教育に結びつけているのですが、そのことの重要な含意についてはいつか述べる機会があるかもしれません。ともかく調和ではなく、「自分自身の窮状を告白するような」（Ibid.）そういうところから教育への情熱が出てくるのだということは、素晴らしい言い方ではありませんか。人間の持つべき宿命と、そこに現れる「愛」と「自由」、そして私が述べてきた「家庭」ということの意味が「教育」という思想の中に言い留められていると思います。

（『アンデレックス』No.108, 2003.2.）

第7章 「生きられる学問」のために——「世界の市民」に向けて（7）

〈要約：この章では人間形成と学問について語られる。哲学することは自らの生きる道を考えることである。人間の幸せについて考えることである。よく生きることについて考えることである。〉

学問は「生きられる学問」でなければならず、学ぶことは「生きること」でなければならない。哲学も本来「生きられる学問」であり、実は最もそれに当たる学問であった。哲学はまさに観念の冒険によって紡ぎだされ、文明と結び合って歴史となる。あるいは、最も若い学問である経営学の歴史（経営学史）は企業活動によって彩られる二十世紀文明の進展とともにあり、それはまさに現代文明を描き出す。歴史を学ぶことは「いま」という時代すなわちわれわれが生きている時代を理解することであり、未来を見る眼差しを獲得することである。

理系の学問、数学や物理学についても同じ「生きられる学問」ということが言える。数学者の岡潔（1960年文化勲章）は、数学は何の役に立つのかという問いに対して、数学は

闇を照らす光だ、それは白昼には要らないが、世相が闇になったときほど必要なのだ、と答えたと言われている（帯金充利『天上の歌 — 岡潔の生涯』新泉社、2003年）。全文略）（『アンデレクロス』No.110, 2003.7.）

第8章 世界の平和そして愛 ——「世界の市民」に向けて（8）

〈要約：この章は、世界の平和と愛が人々の理想として共有されることと「世界の市民」について語られている。

日本には固有の文化があり、歴史と営みがある。それは日本という国の個性である。家庭における理想の愛と、地球社会における理想の平和は、一方は個人的で私的な色彩が強く、他方は人類共通の普遍性をもつものであるが、そこには両者を貫く普遍の理想があることもまた直観できるのである。愛と平和とはそういう意味で一つなのである。

福永武彦の小説『草の花』の1節が引用される。日本が戦争に駆り立てられていた時代の一青年の手紙である。そこには戦争にたいする恐怖と、国家の意思に従わせられることと「世界市民」としての自覚の間の矛盾と葛藤が語られている。戦争ほど「世界市民」と矛盾するものはない。

「僕の教養がギリシャ語の Kosmopolites（コスモポリテース）の観念の下に培われたのは当然のことだったろう。しかし僕が世界市民として感じさせられることと、一々矛盾したのだ。戦争が始まり、いつ兵隊に取られるかも分からない危険が重苦しい空気のように立ち罩こめて来るにつれて、僕の精神はやみがたく次の一点に集注した、—— 如何にして武器を執ることに自分を納得させるか。そして自我は、絶えず意識の上に次のような問答を繰り返した、—— 殺せるか、死ぬか。」（新潮文庫、二〇三頁）全文略）

（『アンデレクロス』No.112, 2003.12.）

《アンデレクロスの8章》で引用された文献

〈第1章〉

マックス・ウェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波文庫。

ゲーテ『若きウェルテルの悩み』竹山道雄訳、岩波文庫。高橋義孝訳、新潮文庫、など。

〈第3章〉

Whitehead, A. N., *Essays in Science and Philosophy*, Part 3. Education, 1947., New

York, Greenwood Press, 1968.

蜂谷昭雄他訳『科学・哲学論集（上）』（ホワイトヘッド著作集第14巻）、松籟社、1987年。

Whitehead, A. N., *Science and the Modern World*, 1925., The Free Press, New York, 1967.

上田泰治、村上至孝訳『科学と近代世界』（ホワイトヘッド著作集第6巻）、松籟社、1981年。

〈第5章〉

ロマン・ロラン『魅せられたる魂』宮本正清訳、岩波文庫全5冊。

〈第6章〉

トーマス・マン『ゲーテを語る』山崎章甫訳、岩波文庫。

〈第7章〉

帯金充利『天上の歌 — 岡潔の生涯』新泉社、2003年。

〈第8章〉

福永武彦『草の花』新潮文庫。